

# 琉球大学学術リポジトリ

児童の心理的ストレスとライフイベント — ストレスフル・ライフイベント尺度の地域比較分析を中心に —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 中澤, 潤, 井上, 厚, 當山, りえ, 島袋, 恒男, Kakazu, Tomoko, Nakazawa, Jun, Inoue, Atsushi, Touyama, Rie, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8171">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8171</a>

## 児童の心理的ストレスとライフイベント

— ストレスフル・ライフイベント尺度の地域比較分析を中心に —

嘉数朝子\* 中澤潤\*\* 井上厚\*\*\* 當山りえ 島袋恒男\*

### Children's Life Event and Psychological Stress — Differences between Chiba and Okinawa —

Tomoko KAKAZU Jun NAKAZAWA Atsushi INOUE  
Rie TOUYAMA Tsuneo SHIMABUKURO

本研究では児童のストレスフルなライフイベント尺度の地域比較を主な目的とし、小学校の3, 5年生を対象に、ライフイベント尺度の体験数、体験率、サポート要因、ストレス反応における沖縄県と千葉県の比較を行った。結果は、ストレスフルなライフイベントの体験数も、項目ごとの体験率の比較でも、沖縄県のほうが千葉県よりも多いことが明らかになった。また、沖縄県のほうがソーシャルサポートも多く受けていることが分かった。沖縄県では家族に関連したライフイベント項目が多いことが特徴的であった。ソーシャルサポートでは兄弟からのサポートが多いことが特徴的だった。

#### 背景と目的

心理的社会的なストレス因（ストレッサー）には、急性と慢性の区別ができる。急性のストレッサーを測定するものとして著名なものが、Holmes & Rahe (1967) の開発したストレスフル・ライフイベント尺度である。彼らは生活環境の変化（結婚、配偶者の死、失業など）が疾病の心理社会的な原因であることを示した。このような研究はその後多くの国で追試された。また、思春期 (Compas. et al, 1987) や児童期 (Dubow & Tisak, 1989) などにおいてもライフイベント尺度が作成された。

ストレスと対処行動に及ぼす文化の影響に関する心理学的研究は近年増加してきている。こ

の点についてSlavinら (1991) は、移民などだけでなく、修学や仕事などで海外移住するものが増加するなど、文化間移動が激増したため、文化の問題を抜きにしてはストレスカウンセリングは成功しないと指摘している。ストレスフルなライフイベントについて我が国では、成人 (宗像; 1986) や大学生 (久田・丹羽; 1987) の研究はあるが、80年代では児童期についての尺度は作成されていなかった。いじめや不登校など児童・生徒の問題行動の増加が憂慮されている現代の日本において、ストレスフルなライフイベントを特定することは家庭や学校教育において重要な基礎資料となるため、ライフイベント尺度の作成は急務である。

\*琉球大学教育学部 \*\*千葉大学教育学部 \*\*\*聖カタリナ女子大学社会福祉学部

このような背景から、Nakazawa (1997) は、日本における子どものライフイベント尺度の作成を試みた。この尺度は、小学校教師との合議を基に児童用ライフイベント項目を収集したものであるが、肯定的なものも否定的なものも両方を含んでおり、過去1年間にいくつ経験したかを問う尺度であった。彼は、これに加えて、外的緩衝要因としてのソーシャルサポートと、個人内緩衝要因としての社会的問題解決能力の要因を取り上げた。加えて、客観的評定として問題行動の教師評定と級友による社会測定的地位も検討した。主な結果は次の通りであった。イベント体験数はストレス反応と正の相関があった。ライフイベントを多く経験した子どもはソーシャルサポートを多く受けていた。社会測定的地位の低い子どもはストレス症状や問題行動を示し、ソーシャルサポートの受容は少なかった。

Nakazawa (1997) のライフイベント尺度は体験数のみが指標であった。この点を改善するために、嘉数・井上・當山・知花・砂川 (1997) は、小学校3、5年生を対象に、各項目ごとに主観的なストレス度の重みづけを行った。因子分析の結果、ライフイベント尺度の因子構造には学年差があった。ライフイベント体験数とストレス反応の間には弱いが有意な正の相関が得られた。その他の要因としてソーシャルサポートも検討したが、ライフイベント体験数とソーシャルサポートの受容量には有意な正の相関があった。ソーシャルサポートのストレス緩衝効果がえられた。

以上のような研究経過をもとに、本研究では地域比較を主な目的とし、小学校の3、5年生を対象に、ライフイベント尺度の体験数、体験率、サポート要因、ストレス反応における沖縄県と千葉県との比較を行う。

本研究の第1の目的は地域差の検討である。沖縄県と千葉県を検討するが、首都圏と地方都市という違いのほかに、沖縄県は地理的条件や歴史的背景が異なる。失業率や母親の就労率、離婚率なども沖縄県のほうが高いことから、予測としては下記のようなことがあげられる。児

童が体験したイベント数は沖縄県のほうが高いだろう。一方で、伝統的地域社会からの援助、ユイマールといった支援は多いであろうから、社会的サポートは沖縄県のほうが多いだろう。

本研究の第2の目的は、ライフイベント尺度の個々の項目の主観的なストレス度に、体験したことがどう影響するかを検討することである。具体的には、ライフイベントの重みづけ尺度を用いて個々のライフイベントのストレス度の主観的評価が、体験者と非体験者で異なるかを検討する。これは沖縄県のみで実施した重みづけ尺度を用いるので、沖縄県のみ分析となる。

## 方 法

<被験者> 沖縄県公立小学校の小学校3年生227名(男子112名, 女子115名), 5年生195名(男子93名, 女子102名)の合計422名。千葉県公立小学校の小学校3年生157名(男子78名, 女子79名), 5年生153(男子87名, 女子66名)の合計310名。

<調査尺度>

### 1. ライフイベント尺度25項目

過去1年間に経験した項目に○印をつけさせた。

### 2. ライフイベント重みづけ尺度25項目

「仮に経験したら、どの程度ストレスを感じるか」を検討するための項目で、「全く大変でない(1)」から「とても大変(4)」までの4段階で評定させた(沖縄県のみ実施)。

### 3. ソーシャル・サポート15項目

「情緒的」(例: 励ましてくれる, なくさめてくれるなど), 「知的」(例: 手伝ってくれる, 教えてくれるなど)の2下位因子からなる。父親, 母親, 兄弟, 友人, 教師からの社会的サポートを受領した程度を, 「してくれない(1)」から「してくれる(4)」までの4段階で評定させた。

### 4. ストレス反応尺度15項目

「無気力」(例: がんばれない, めんどくさいなど), 「身体疲労」(例: 身体がだるくなってしまう, 頭がいたくなるなど), 「心身不安

定」(例：心配なことがある、やりたいことがやれていない感じがするなど)の3下位因子からなる。各項目につき「ちがいます(1)」から「そうです(4)」までの4段階で評定させた。

## 結果と考察

目的1：地域比較

### 1 ストレスフル・ライフイベント尺度の体験総数

ストレスフル・ライフイベント尺度の体験総

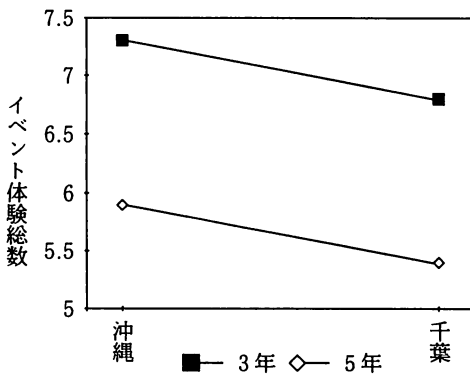


図1 イベント体験数の地域比較

数を算出し、地域×学年の2要因の分散分析を行った(図1参照)。地域( $F(1/714) = 9.215, p < .01$ )の有意な主効果がえられ、沖縄県( $M = 6.69, SD = 2.64$ )のほうが千葉県( $M = 6.13, SD = 2.18$ )よりも多いという結果であった。学年( $F(1/714) = 49.132, p < .001$ )の有意な主効果もえられ、3年生( $M = 7.05, SD = 2.60$ )のほうが5年生( $M = 5.79, SD = 2.13$ )よりも体験したイベントの総数が多かった。

### 2 ストレスフル・ライフイベント項目ごとの体験率

各イベント項目ごとに、地域比較をt検定によって行った結果を表1に示した。沖縄県のほうが、「なかよしの友だちとケンカした」、「成績が下がった」、「なかよしの友だちが転校してしまった」などの9項目で千葉県よりも体験率が高かった。

千葉県のほうが沖縄県よりも体験率の高い項目は「先生が変わった」、「好きな男の子(女の子)ができた」、「ペットが死んでしまった」などの5項目であった。沖縄県のほうが体験率

表1 イベント項目ごとの体験率の地域比較

	体 験 率		
	沖縄 (n=422)	千葉 (n=295)	$\chi^2$ 値
沖縄の体験率が高いライフイベント			
3. 転校した。	13.7% (58)	4.4% (13)	16.97***
7. なかよしの友だちが転校してしまった。	39.6% (167)	31.2% (92)	5.29*
8. なかよしの友だちに新しい友だちができて、あまり遊んでくれなくなった。	26.1% (110)	16.3% (48)	9.70**
9. なかよしの友だちとケンカした。	61.6% (260)	50.8% (150)	8.22**
13. 成績が下がった、苦手な科目ができた。	48.1% (203)	39.0% (115)	5.85*
19. お父さんが仕事のために離れて暮らすようになった。	9.5% (40)	5.1% (15)	4.73*
20. お父さんが仕事のために離れて暮らすようになった。	14.0% (59)	6.1% (18)	11.25***
21. 弟または妹が生まれた。	6.9% (29)	1.4% (4)	12.03***
27. 引っ越しをした。	16.8% (71)	6.1% (18)	19.65***
千葉県の体験率が高いライフイベント			
2. 先生が変わった。	83.9% (354)	90.8% (268)	7.32**
5. 運動会のリレーの選手に選ばれた。	9.2% (18)	23.4% (69)	16.92***
10. 好きな男の子(女の子)ができた。	28.9% (122)	46.4% (137)	23.13***
17. お父さんまたはお母さんが仕事をやめた。	7.6% (32)	12.2% (36)	4.32*
25. ペットが死んでしまった。	28.2% (119)	35.9% (106)	6.39*

※ ( ) 内：実数

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

が高い項目が多かった。

### 3 ソーシャル・サポート

表2に沖縄県と千葉県とのソーシャルサポート尺度得点の平均値を示し、地域×性の分散分析を行った。「情緒的サポート」の下位因子においては、有意な地域の主効果が得られた。沖縄

県のほうが千葉県よりも「情緒的サポート」を多く受けていた。性の有意な主効果もえられ、女子のほうが男子よりも多く受けていることが分かった。「知的サポート」においては性の主効果のみが有意となり、女子のほうが男子よりもサポートを多く受けていることが分かった。

表2 ソーシャルサポートの地域×性比較

	地 域		性		F 値		
	沖 縄	千 葉	男 児	女 児	地域差	性 差	交互作用
サポート							
情緒的サポート	55.25 (12.81)	52.71 (12.61)	52.85 (13.02)	55.62 (12.38)	4.78*	5.88*	0.01
知的サポート	44.71 (8.79)	45.14 (7.63)	44.16 (8.26)	45.69 (8.29)	0.43	4.73*	0.04

\* $p < .05$

表3にソーシャルサポート対象源別の得点の平均値を示した。t検定によって沖縄県と千葉県との比較を行ったところ、兄弟と先生での情緒的サポートの量が沖縄県のほうが高かった。知的サポートでは、兄弟では沖縄県が、友人では千葉県が多かった。沖縄県での兄弟のサポート量の多さは、出生率の高さを反映しているのだろう。

### 4 ストレス反応

表4にストレス反応の3下位尺度の平均値を示した。地域×性の2要因の分散分析を行ったところ、「無気力」では、有意な地域の主効果が得られ、千葉県のほうが沖縄県よりも無気力の得点が高かった。有意な性の主効果もえられ、男子のほうが女子よりも高いという結果だった。

「身体疲労」では、性の有意な主効果がえられ、女子のほうが男子よりも「身体疲労」の得点が高かった。地域×性の交互作用が得られた(図2参照)。男子では沖縄県(M=9.62, SD

表3 サポート源別の地域比較

	沖 縄		千 葉		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
情緒的サポート					
父親	11.22	3.57	10.83	3.44	1.42
母親	13.15	2.82	12.68	3.26	1.93
兄弟	9.41	3.65	8.46	3.44	3.22**
友人	11.32	3.44	11.42	3.12	0.39
先生	10.59	3.60	9.76	3.47	2.94**
知的サポート					
父親	9.01	2.66	9.32	2.61	1.48
母親	10.26	2.10	10.48	2.17	1.32
兄弟	7.42	2.92	6.70	2.91	3.00**
友人	8.97	2.54	9.35	2.19	2.06*
先生	9.19	2.49	9.36	2.39	0.90

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

=3.12)のほうが千葉県(M=8.96, SD=2.86)よりも得点が高く、女子では千葉県(M=10.12, SD=3.19)のほうが沖縄県(M=9.78, SD=3.05)より高いという結果であった。「心身不安定」では有意な地域の主効果が得ら

表4 ストレス反応の地域×性比較

	地 域		性		F 値		
	沖 縄	千 葉	男 児	女 児	地域差	性 差	交互作用
ストレス反応							
無気力	12.61 (3.82)	13.52 (3.95)	13.53 (3.98)	12.43 (3.74)	7.98**	12.58***	2.34
身体 疲労	9.70 (3.08)	9.51 (3.07)	9.34 (3.02)	9.91 (3.10)	0.51	5.81*	4.24
心身不安定	10.73 (2.54)	9.15 (2.45)	10.07 (2.65)	10.10 (2.59)	65.70***	0.06	0.80

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

れた。沖縄県のほうが千葉県よりも心身不安定が高いという結果であった。以上の結果から、

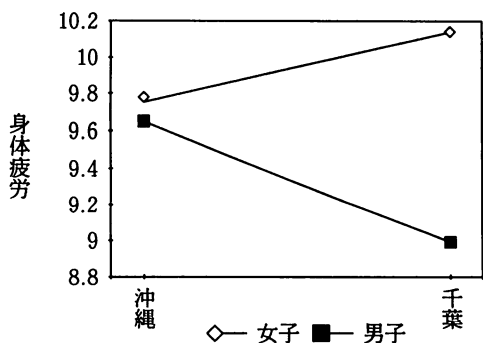


図2 身体疲労における地域比較

沖縄県の児童のほうがストレッサーを多く体験しており、また、ソーシャル・サポートも（特に情緒的サポート）沖縄県の児童のほうが多く受けていることが明らかになった。ストレス反応は下位領域によって、地域差の方向が異なることは興味深い。

### 5 項目ごとの体験者と非体験者のストレス度の比較

t検定によって、項目ごとにライフイベント体験の有無でストレス反応に差があったかどうかを検討した。千葉県と沖縄県の結果を表5に示した。

沖縄県で体験者のほうがストレス度が高いラ

表5 ライフイベント体験により差異のあったストレス項目数

沖縄

体験者のストレス度が高いライフイベント	体験者の割合	ストレス内容	非体験者	体験者
10. 好きな男の子(女の子)ができた。	28.9%	心身不安定	2.60	2.89**
11. 病気や事故で長い間(1週間以上)学校を休んだ。	9.7%	身体疲労	1.91	2.24**
		心身不安定	2.66	2.90*
13. 成績が下がった, 苦手な科目ができた。	48.1%	無気力	1.98	2.23**
		身体疲労	1.83	2.60**
		心身不安定	2.59	2.78**
16. 今までいつも家にいたお母さんが仕事を始めた。	22.5%	身体疲労	1.90	2.06*
21. おじいさんやおばあさんと一緒に暮らし始めた。	6.9%	無気力	2.08	2.38*
23. 家族のだれかが入院した。	20.9%	心身不安定	2.64	2.86**
24. 家族のだれかが亡くなった。	7.8%	心身不安定	2.66	2.94*

非体験者のストレス度が高いライフイベント

4. 班長や学級委員に選ばれた。	41.5%	無気力	2.16	2.02*
12. 成績が上がった。	60.2%	無気力	2.22	2.03**
15. おけいこごと(ピアノ, 習字など)に通い始めた。	24.6%	無気力	2.15	1.94**
		身体疲労	1.98	1.84*
22. お兄さん又はお姉さんが大学へ行く, 仕事を始めた, 結婚したなどの理由で家を出た。	3.8%	身体疲労	1.95	1.61*

千葉

体験者のストレス度が高いライフイベント	体験者の割合	ストレス内容	非体験者	体験者
7. 仲良しの友達が転校してしまった。	30.3%	第1因子(心身不安定)	2.15	2.36*
9. 仲良しの友達とケンカした。	51.0%	第1因子(心身不安定)	2.10	2.32**
		総点	2.06	2.19*
13. 成績が下がった, 苦手な科目ができた。	63.2%	第2因子(無気力)	2.13	2.37**
14. 塾に通い始めた, 家庭教師に教わるようになった。	24.8%	第1因子(心身不安定)	2.14	2.43**

非体験者のストレス度が高いライフイベント

4. 班長や学級委員に選ばれた	36.5%	第2因子(無気力)	2.29	2.11*
12. 成績が上がった	54.8%	第2因子(無気力)	2.33	2.12*
23. 家族の誰かが入院した	14.5%	第1因子(心身不安定)	2.25	2.00*
		第2因子(無気力)	2.27	1.94**
		総点	2.17	1.89**

ライフイベント項目は7項目で、自己に関する項目が3つで（その内、ネガティブな項目は2つ（長期欠席や成績の下降）、中性的な1項目（好きな子ができた）と家族に関わる4項目であった。非体験者がストレス度の高い項目は自己に関する3項目と家族に関する1項目であった。

千葉県で体験者のほうがストレス度が高いライフイベント項目は4項目で友人に関する2項目と自己に関する2項目であった。非体験者がストレス度の高い項目は自己に関する2項目と家族に関する1項目であった。

体験者のほうがストレス度が高いライフイベント項目は両県ともにネガティブで統制不可能なものが多いが、沖縄県では家族に関連した項目が多いことが特徴的である。その中でも興味深い項目は「祖父母と暮らし始める」が「無気力」と関連が深いことである。3世代同居のストレスは祖父母や両親との間で強いと予想され、子どもと祖父母の間には直接的葛藤はないだろう。しかし、家庭内での大人の間であつれきが生じ、家庭内に緊張が醸し出されても、子どもには統制することが不可能である。そのその結果として無気力反応を示すと推測される。

非体験者のほうがストレス度が高いのは、両県ともにポジティブな項目で統制可能な項目（学級委員に選ばれた、成績が上がった）である、沖縄県の「兄姉が家を出る」項目は他とは少し異質であるが、進学、就職などを意味することが多いであろうからポジティブな内容かもしれない。また、子ども自身の生活には、さほど変化を及ぼさないとされる。千葉県の「家族の誰かが入院した」の項目は、ネガティブな

項目であるが注目される。中澤（1997）は家族の入院が家族の結束をもたらしたり、退院や病気の克服が安心感や安定感をもたらしているのかもしれないと考察している。同じ項目が、沖縄県では体験者のほうがストレス度の高い項目となっている。家族の入院といっても期間や病状、経過の違いでストレス度は異なってくるだろう。本研究では過去1年間に経験したイベントを取り上げたが、期間の設定には考慮の余地がある。3ヶ月後、6ヶ月後と変化させると、イベント体験とストレス反応との関係は変わってくるものもあるだろう。ストレスサーからストレス反応にいたる過程は相互作用的なものであるから、今後プロセスとしてのストレス対処を検討する必要がある。

## 目的2

### 6 項目ごとの体験者と非体験者のストレス度の重みづけの比較

沖縄県のみを対象としてt検定によって、項目ごとにライフイベント体験の有無でストレス度の重みづけに差があったかどうかを検討した。体験者のほうがストレス度の重みづけが高いライフイベント項目は3項目で友人やペットに関するネガティブで統制不可能なものである（表6-1）。

非体験者のほうがストレス度が高いのは、ポジティブな項目や（学級委員に選ばれた、成績が上がった）、何かを始める項目（塾やおけいごとや部活を始める）である（表6-2）。これらの項目はすべて自己に関するもので、統制可能な項目であるといってもよい。

表6-1 体験者の重みづけが高いライフイベント項目

ライフイベント項目	体験者		非体験者		t 値
	N	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	
7. なかよしの友だちが転校してしまった。	166	3.681 (0.705)	254	3.504 (0.819)	2.355*
8. なかよしの友だちに新しい友だちができて、あまりあそんでくれなくなった。	109	3.422 (0.820)	312	3.115 (0.979)	3.191**
25. ペットが死んでしまった。	117	3.812 (0.571)	300	3.647 (0.733)	2.443*

\* p<.05, \*\* p<.01

表6-2 非経験者の重みづけが高いライフイベント項目

ライフイベント項目	体験者		非体験者		t 値
	N	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	
4. 班長や学級役員にえらばれた。	175	2.794 (0.984)	244	3.164 (0.946)	3.878***
5. 運動会のリレーの選手にえらばれた。	18	1.944 (0.938)	175	2.754 (1.013)	3.252**
6. 部活動やクラブ活動をはじめた。	78	1.949 (0.910)	116	2.267 (0.954)	2.322*
12. 成績があがった。	251	2.016 (1.180)	165	2.285 (1.306)	2.179*
14. 塾に通いはじめた, 家庭教師に教えてもらうようになった。	124	2.411 (1.196)	295	2.841 (1.093)	3.567***
15. おけいこごとに通いはじめた。	104	2.288 (1.146)	316	2.623 (1.166)	2.552*

\* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001

## 総合的考察

### 1 地域比較

予想と一致して、ストレスフルなライフイベントの体験数も、項目ごとの体験率の比較でも、沖縄県のほうが千葉県よりも多いことが明らかになった。また、沖縄県のほうがソーシャルサポートを多く受けていることが分かった。沖縄県では家族に関連したライフイベント項目が多いことが特徴的であった。ソーシャルサポートでは兄弟からのサポートが多いことが特徴的だった。これは沖縄県が出生率が高いため兄弟数が多いことを反映しているのだろう。沖縄県と千葉県では家族の規模も機能も違う。沖縄県の子どもにとって、家族はストレス源でもあり、サポート源でもあるというアンビバレントな価値を持つことが示唆される。

ストレスに及ぼす文化の影響に関する研究は90年代になって増加してきた分野である。Aldwin (1994) は文化がストレスおよび対処過程に影響する面として、①ストレスサーのタイプ、②ストレスフル度の査定、③対処方略の選択、④文化が提供する社会的資源の4つがあるという。本研究では①のストレスサーのタイプとして、ライフイベントの地域比較を検討したことになる。Aldwin (1994) の展望の中で引用されたこの面の研究は文化人類学的研究が多く、心理学的・実証的研究は少なかった。その意味でも本研究の意義は大きいと思われる。

今後は、対処行動における地域差を検討したい。Aldwin (1994) は、文化によって適応的

対処方略が異なると主張している。つまり、ある文化で適応的な対処行動であっても、他の文化では不適応をひき起こすこともあるという。例えば、西欧人においては積極的対処が適応的であっても、東洋人においては同じ対処がストレス反応とむすびついているという。日本の中でも、いくつかのサブカルチャーがある。県民性の違いなどは、そのサブカルチャーの中での適応的対処方略が異なることに起因するのではないだろうか。

### 2 ライフイベント尺度の項目ごとの検討

ストレスサーの区別の1つに、快・不快の次元がある。Selye (1956) は前者をユーストレス、後者をディストレスとよんで区別している。前者は害の少ない、成長に必要なストレス源、後者は不快で害のあるストレス源であるという。宗像 (1995) は離婚や病気などのディストレスが心身症状とむすびつきやすく、結婚や仕事での成功などのユーストレスは心身症状とは無関係であることを紹介している。これらの研究はいずれも成人を対象としたものであり、児童を対象としたものはほとんどない。大人よりも統制力が劣る子どもにとっては、ユーストレスとディストレスの概念の区別が大人と同じ意味を持つとは限らない。

そこで、Nakazawa (1997) は、個々のライフイベントとストレスとの関係を明らかにするために、項目ごとに体験者と非体験者によってストレス反応を比較した。その結果、ライフイベントにはポジティブとネガティブの2種のタ



イプがあることが明らかになった。ポジティブなライフイベントを経験したものは、経験しないものよりもストレス反応が低く、ネガティブなライフイベントを体験したものはストレス反応が高かった。このことから、児童においても大人と同じように、ユーストレスとディストレスの概念を区別することができることが明らかになった。本研究では、この点をさらに確認するためにライフイベントの体験が主観的ストレス度評価に影響するかどうかを検討した。体験者がストレス度の重みづけが高い項目は、他者に関するものでネガティブな項目であった。非体験者がストレス度の重みづけが高い項目は、自己に関するもので、ポジティブで統制可能な項目が多かった。本研究の結果はNakazawa (1997) と一致しており、子どもにおいてもユーストレスとディストレスの概念の区別があることを確認するものであった。

「友達の転校」や「ペットの死」など、子ども自身が統制することができないことを経験したものは、そのライフイベントについての主観的なストレス度の評価が高かったことになる。すなわち、最近のストレス体験が主観的ストレス評価を増大させたことになる。

「委員やリレー選手に選ばれる」などのポジティブな経験をしていない者は、その出来事の大変さを過重に評価していることになる。ポジティブなライフイベントを経験し、対処し終えた者は有能感や効力感を高めることができたので、それほど大変でないと評価したのであろう。

この結果からポジティブなライフイベントを体験させることが、子どもの有能感を高めると結論づけるのは早計だろう。統制可能性には個人差があることを忘れてはならない。本研究の中の体験した者にとって、学級委員に選ばれることは統制可能であった可能性もある。つまり、力量のない子どもにとって選手や役員に選ばれることは、統制可能でないと認知し、かえってストレス反応を呈するかもしれない。

## 付 記

本研究は、1996年度の安田生命社会事業団の助成を受けた。記して深謝いたします。

## 引用文献

- Aldwin, C.M. 1994 Stress, coping, and personality. New York: The Guilford Press.
- Compas, B.E., Davis, G.E., Forsythe, C.J. & Wagner, B.M. 1987 Assessment of Major and Daily Stressful Events During Adolescence: The Adolescent Perceived Events Scale. *J. Consulting and Clinical Psychology*, 55, 531-541.
- Dubow, E.F., & Tisak, T. 1989 The Relation between Stressful Life Events and Adjustment in Elementary School Children: The Role of Social Support and Social Problem-Solving Skills, *Child Development*, 60, 1412-1423.
- 久田満, 丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレスサー測定に関する研究 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 27, 45-55.
- 宗像恒次 1995 ストレス解消学 小学館
- Nakazawa, J. 1997 Children's life event and stress: social support, social problem solving as a buffer of children's stress responses. 千葉大学教育学部紀要, 45, I (印刷中)
- 中澤潤 1997 児童のライフイベントとストレス 日本心理学会第61回大会発表論文集, p289.
- Slavin, L.A., Rainer, K.L., McCreary, M.L., & Gowda, K.K. 1991 Toward a multicultural model of the stress process. *J. Counseling and Development*, 70, 156-163.
- Selye, H. 1956 The stress of life. New York: McGraw-Hill.